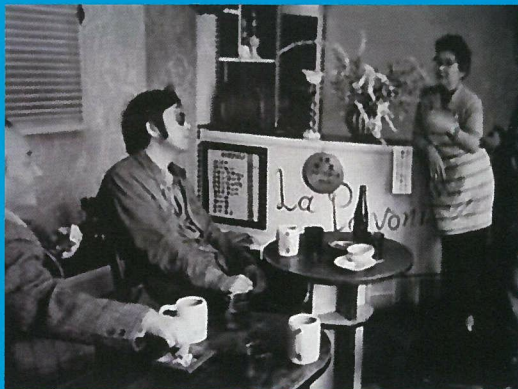
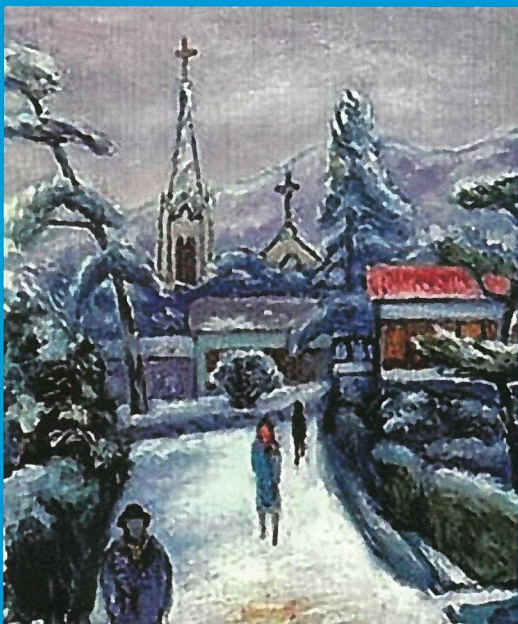


阪神間文学に見る 大戦下の街と暮らし



パボー二で戦時の思い出を語る野坂昭如



大石輝一画 雪の夙川カトリック教会
(いずれも堂島カーサ・ラ・パボー二蔵)

海岸沿いに軍需工場が立ち並んでいた、阪神間は太平洋戦争末期の空襲で大きな被害を受けました。終戦の年を阪神間で過ごした野坂昭如、小松左京、須賀敦子、遠藤周作たちは、当時の体験を作品の中に残しています。

また手塚治虫は『アドルフに告ぐ』で、戦時下の神戸の街並みや、野坂昭之の出征シーンを描いています。このように多くの作家が描いた戦時下の阪神間の街と暮らしを作品から抜粋し、写真とともに紹介します。

野坂昭如は、唯一、戦時中も開いていた夙川の喫茶店パボー二の大石輝一画伯から、カトリック夙川教会のブスケ神父の話を知っていました。神父は昭和 18 年憲兵に連行され帰らぬ人となりましたが、この悲劇は教会関係者の間でも長年、内密にされていました。神父の死から 18 年後のある日、画伯は神父の悲劇を知り、その年のクリスマスに、神父の肖像画を描いて同教会に寄贈。約 35 年ぶりに約束を果たしたのです。今回は、その肖像画も展示いたします。

ふるってご来場ください。

展示 平成 28 年 7 月 16 日(土)～8 月 15 日(月)

会場 芦屋市業平町 8-24 芦屋市民センター 3 階展示場

7 月 29 日(金) 13 時～14 時 展示品の解説を会場にて行います

ギャラリーレクチャー

日時 平成 28 年 8 月 6 日(土) 午後 2 時～午後 3 時

会場 芦屋市民センター 203 室 (定員 60 名 先着順に受付)

講演テーマ 「ブスケ神父と大石輝一画伯の友情」

講師:五島真理為 HIV と人権・情報センター元理事長

(著書「いのち、響きあって一病気や障害は来た道、行く道」など)